

新古今和歌集伝本攷

―所蔵本の位置づけ―

千古 利恵子

新古今和歌集の伝本は多く、未だその数は確定されていない。しかし、先学諸氏の調査・研究によって、現存する伝本は①成立過程によって四類に分けられること②伝本の大半が第二類（竟宴直後から切継の行われている途中で書写された本文をもつ伝本）に属すること、が明らかにされている。本稿では、所蔵小形本の本文を寿本（新編国歌大観の底本）の本文と比較し、所蔵本の系統を検証するとともに、伝本研究における小形本調査の有用性を考えたい。

キーワード：新古今和歌集、写本、小形本、千古所蔵本、寿本

1. はじめに

現存する新古今和歌集の伝本は、その多くが第二類本に属する伝本であることが解明されており、その中には所在先が公表されているものもある。だが、本文については未公開というものが多く、小形本の場合は、伝本調査の対象から外されている感さえある。しかし、現代においても、新古今和歌集の注釈書類は出版され、流布し続けていることから、今後の伝本研究は、貴族間で流布した第二類本を転写したと推測される小形本に注目する必要があるだろう。

2. 新古今和歌集の伝本分類

新古今和歌集の系統分類は、久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎・田中裕・橋本不美男各氏をはじめ、多くの研究者によって調査が進められてきた。その結果、小宮本（日本古典文学大系の底本）- 寿本（新編国歌大観の底本）- 伝冷泉為相筆本（新日本古典文学大系の底本）ならびに、前田本・烏丸本・鷹司本・穂久通文庫蔵本等が、

影印、翻刻で紹介され¹⁾、現存する新古今和歌集の伝本は、その成立過程によって四系統に分類しうることが、明らかにされている。赤瀬信吾氏は、新古今和歌集の系統について、次のように述べる²⁾。

- ①長く複雑な編集の過程をたどった新古今集には、もともと唯一の原本といったものは存在していなかったと思われる。
- ②新古今集の伝本は、その成立の諸段階に即して、次の四類があったものと想定される。

さらに同氏は、四類を次の如く分類している。

- 第一類本 元久二年（1205）三月二十六日、新古今和歌集竟宴の行われた時の本文を伝える本（竟宴本）
- 第二類本 切継の行われている途中で書写された本文を伝える本
- 第三類本 建保四年（1216）十二月二十六日、切継の完了した時点で書写された本文を伝える本（源家長本）
- 第四類本 隠岐における後鳥羽院の選抄本文を伝える本（隠岐本）

『国書総目録』で確認し得る新古今和歌集の現存する写本は、二十一代集中のものをも含めると極めて多く、その大半は、前掲の第二類本、即ち「切継の行われている途中で書写された本文を伝える本」であるといわれる。しかし、それらには、「切出し歌」の数・「撰者注記」の有無・本文異同等、様々な差異があると報告されている。そのことから、現存諸伝本を比較し、その調査結果を蓄積することが、第二類本から第三類本が成立する過程を解明するためには不可欠であると考えるのである。また、調査で明らかになる第二類本系本文の異同を検証すれば、後鳥羽院の詠歌理念が確立する経緯を探る重要な手掛かりが得られると思うのである。

3. 所蔵本の書誌紹介と収録状況

古写本として珍重されるものは、料紙や表紙に趣向を凝らしていることが多い。小形本の場合、新古今和歌集に限らずとも、その装丁は極めて簡素である。小形本は、貴族社会で流通した写本を書写・製本し、庶民層に流布していた写本であったからであろうか。今回、筆者が入手した小形本も、その装丁は極めて簡素である。以下、その書誌を簡単に紹介する。

【形態】

13.5cm×9.5cmの袋綴、4穴。一冊。

幕末期写本。表紙・本文料紙は楮紙。表紙は薄茶色。表紙の左端題箋(5.5cm×2.0cm)に「第九号」と墨書。墨付245丁(ただし、53丁裏・151丁裏・242丁表は白紙)、遊紙は2丁(前1・後1)。一面10行、和歌は一首1行書きで詞書は概ね三字下げ。

仮名序は巻頭に、真名序は巻末に置く。

奥書・撰者名注記はない。

【排列】

寿本(新編国歌大観の底本)の排列に比べ、異同はない。

【収録歌数】

収録歌数は1981首。新編国歌大観本にみえない次の3首を収録する。

A. (雑下1784歌の次に排列)

太神宮哥合 太上天皇
大空に契る思ひのとしもへぬ
月日もうけよ行末の空

B. (雑下1801歌の次に排列)

題しらす 大中臣よしのふ朝臣
水くきの中にのこれるたきのをと
いとしも遠き秋の色哉

C. (神祇1813歌の次に排列)

奉幣使に住吉にまいりて
むかし住けるとまりの
あれたりけるをよみ侍ける

津守有基

住よしと思ひし宿はあれにけり

神の印をまつとせしまに

所蔵本は、幕末期の写本とされているが、明確な書写年や書写者は分からない。また、書写に用いた伝本に関する記述はなく、以下の記述だけがある。なお、記述は、巻二十・釈教歌の巻軸歌「やみはれて」の後に、本文と同筆で墨書されている³⁾。

巻第二 春哥下
題しらす 中納言家持
故郷に花は散つゝ、みよしの、／山の桜はまた
さかす也
在春雨下花の香に上
題しらす 赤人
こひしくは形見にせんと我宿に／うへし藤波
今盛也

在足引下かくてこそ上

卷第三 夏哥

時鳥の心をよみ待ける 顕照法師
郭公むかしをかけてしのへとや／老のねさめ
に一聲そする

(241 丁表)

在有明下過にけり上

卷第五 秋歌下

題しらす 恵慶法師
高砂のおのへにたてる鹿のねに／ことのほか
にもぬる、袖哉

在鶯こふる下 源山辺上
右之哥在異本

(241 丁裏)

前述の如く、第二類本系に属する伝本の収録
歌数は、「切継」の段階により異なる。新編国歌
大観本の巻末には、「後出歌」十七首、異本歌十
首が掲出されている。

【後出歌】

承元四年九月止之 中納言家持

1979 故郷に花はちりつ、みよしのの
山の桜はまださかずけり
太上天皇

1980 いかにせむよにふるなかめしばのにと
うつろふ花の春のくれがた
顕照法師

1981 ほとゝぎすむかしをかけて忍べとや
おいのね覚にひとこゑぞする
赤染衛門

1982 五月雨の空だにすめる月かげに
涙の雨ははるるまもなし
増基法師

1983 ほととぎすはなたち花のかばかりに
なくやむかしのなごりなるらん

太上天皇

1984 あさつゆのをかのかはらや山風に
みだれて物は秋ぞかなしき

1985 ちぎりけんほどはしらねど七夕の
たえせぬけふの天の川かぜ

1986 高砂の尾上にたてる鹿のねに
ことの外にもぬる袖かな
和泉式部

1987 たれなりとおくれさきだつほどあらば
かたみにしのべ水ぐきの跡
盛明親王

1988 世中のはかなき事をみる比は
ねなくに夢の心ちこそすれ
躬恒

1989 なみのうへにほのにみえつつゆく舟は
浦吹くかぜのしるべなりけり

1990 都にて春をだにやはすぐしえぬ
いづちかかりの鳴きて行くらん
貫之

1991 いくよへし磯辺の松ぞ昔より
立よる浪のかずはしるらむ
能宣朝臣

1992 みづぐきの跡にのこれる玉のこゑ
いとどもさむき秋の風かな
西行法師

1993 ねかはくは花のしたにて春しなむ
その二月のもち月の比
津守有基

1994 すみよしとおもひしやどはあれにけり
神のしるしをまつとせしまに
肥後

1995 をしへおきていりにし月のなかりせば
西に心をいかでかけまし

【異本歌】

太上天皇

1996 おほ空に契る思ひの年もへぬ

月日もうけよ行すゑの空

(寂蓮法師)

1997 みんなの月よ花よとながむれど

ただいつはりのたねとこそなれ

(太宰大式高遠)

1998 なれぬればつらき心もありやとて

たなばたつめのたれにちぎりし

赤人

1999 こひしくは形見にせんと我が宿に

うゑし藤なみ今さかりなり

空仁法師

2000 花の春ももみちの秋もしるかりし

松の梢も見えぬ雪かな

後朱雀院中宮宣旨

2001 あり明の月まつほどにありやとて

うはの空にも出でにけるかな

源順

2002 名をきけば昔ながらの山なれど

しぐるる秋は色かはりけり

清原元輔

2003 うきながらさすがに物のかなしきは

いまはかぎりとおもふなりけり

よみ人しらず

2004 とほくなりちかくなるみの浜ちどり

鳴くねにしほのみちひをぞしる

雅経朝臣

2005 おほかたにおきあへぬ露のいくよしも

あらじ我が身の袖の秋かぜ

*紙数の都合上、詞書は省略し掲出。

以上掲出した「後出歌」「異本歌」並びに寿本と所蔵本とを比較すると、次のことが分かる。

- ・所蔵本は、寿本にはみえないが、正保四年板廿一代集本に収録されている1首[A「大空に」]を収録する。新編国歌大観では「異本歌」(1996歌)として掲出している。

- ・所蔵本に収録された2首[B「水くきの」C「住よしと」]は、寿本に「後出歌」として掲出された(1992歌)(1994歌)である。

- ・所蔵本が「異本歌」として掲げる4首中の3首「古郷に」「郭公」「高砂の」の詠は、寿本では「後出歌」(1979歌)(1981歌)(1986歌)として掲出されている。

- ・所蔵本が「異本歌」として掲げる4首中の1首「こひしくは」の詠は、寿本にはみえないが、紅梅文庫旧蔵八代集本に収録されている。新編国歌大観では「異本歌」(1999歌)として掲出している。

ただし、B「水くきの」の詠と「古郷に」の詠の2首は、寿本との間に本文の異同が認められる。

B「水くきの」の詠(1992歌)

三句「たきのをと」→「玉のこゑ」

四句「いとしも遠き」→「いとどもさむき」

五句「秋の色哉」→「秋の風かな」

【所蔵本の異本歌】「古郷に」の詠(1979歌)

五句「さかす也」→「さかずけり」

「異本歌」として所蔵本が掲出する4首中3首は、寿本の記述「承元四年九月止之」に拠れば、承元四年九月までは収録されていた歌ということになる。他の1首についていえば、承元四年以前の早い段階で切り出されものか、あるいは「切継」が繰り返される過程で、一時期撰入されたことがあり、その1本が伝存され「異本歌」とされているのかもしれない。つまり、所蔵本が「異本歌」とする詠は「後出歌」であったとも考えられるように、「後出歌」「異本歌」の記述は、伝本の系統を検証する上で留意すべき内容だろう。従って、伝本研究を進めるためには、小形本の調査も重要と考えるのである。

4. 所蔵本の特徴

所蔵本の本文と寿本の本文とを比較すると、歌本文・詞書・作者表記に異同が認められる。

なお、所蔵本と寿本との校合結果は、本稿の最後に掲出した。表示にあたり、所蔵本と寿本との間に異同がある場合については、小宮賢次郎旧蔵本・伝為相筆本とも校合し、その結果を記載するので、参照されたい。

次に、本文異同の特徴を紹介する。

①作者表記について

- ・例えば、寿本の表記が「赤人」「貫之」「基俊」「定家朝臣」である場合、所蔵本では「山邊赤人」「紀貫之」「藤原基俊」「藤原定家朝臣」のように、姓から記している。
- ・720 歌と 1763 歌の 2 首は、寿本では「清原元輔」「雅経朝臣」とあるが、所蔵本は「元輔」「雅経」と表記している。

②詞書について

- ・39 歌の場合、寿本は「よみける」と記すが、所蔵本は「よみはべりける」とある。118 歌の場合、寿本は「よみ侍りける」、所蔵本は「よめる」とあり、これと同じ異同は他に 6 首認められる。
- ・元号の異同は、2 例ある。754 歌の場合、寿本は「寿永元年」とし、所蔵本は「仁安元年」とする。寿永元年は 1182 年、仁安元年は 1166 年で、元号改正とは無関係の異同である。754 歌の詞書は、753 歌の詞書「仁安元年大嘗會悠紀・・・」に引きずられた結果生じた異同か。
- 755 歌の場合、寿本は「建久九年」とし、所蔵本は「元暦元年」とする。建久九年は 1198 年、元暦元年は 1184 年。

③歌本文について

歌本文に異同が認められる詠は 48 例である。その中には、次のような助詞や助動詞に異同が生じている詠がある。

- ・258 歌「むすぶてに」の第五句は、寿本では「かたぶきにける」、所蔵本では「傾きにけり」とある。「ける」と「けり」の異同は、1503 歌と 1536 歌の各第五句にもある。
- ・713 歌「君が代に」の第三句は、寿本では「おほけれど」、所蔵本では「おほければ」とある。「ど」と「は」の異同は、833 歌の第三句にもある。

次に示すものは、詠歌内容に影響をきたす異同が認められる詠である。

- ・516 歌「いろかはる」の第五句は、寿本では「のべの秋風」、所蔵本では「野への秋哉」とある。

暮秋のものかなしさにこぼれ落ちる紅涙を、秋の盛りの花の露に擬して詠じた歌である。「秋風が露の色を変えた」とする寿本より、所蔵本の本文が良い。

小宮本と伝為相筆本の本文は、所蔵本と同じ「秋かな」である。

- ・558 歌「おのづから」の第四句は、寿本では「木の葉ふりしく」、所蔵本では「木のはふきまく」とある。

庭の木の葉が音を立てている。それは誰かが訪れて来たからではなく、谷から吹く風の仕業であると詠じた歌である。「ふりしく」では音が聞こえない。

所蔵本の本文「木のはふきまく」がふさわしい。

小宮本と伝為相筆本の本文は、所蔵本と同じ「木の葉ふきまく」である。

- ・928 歌「太山路に」の第五句は、寿本では「雪つもりつる」、所蔵本では「雪つもり

つゝ」とある。

旅人の笠の雪を見て、深山の道に出たのは今朝なのだろうと詠じた歌である。降る雪が笠に積もってゆく情景を詠じるには「つゝ」と結ぶのがふさわしい。

928 歌の次に排列された 929 歌の第五句が「雪はふりつゝ」であることから、所蔵本の本文「雪つもりつゝ」が良いだろう。

小宮本と伝為相筆本の本文は、所蔵本と同じ「雪つもりつゝ」である。

- ・1900 歌「をしほ山」の第四句は、寿本では「ちぎりしはるは」、所蔵本では「契りし色は」とある。

小塩山の神のご加護を願い待っているが、その印の現れだという松の緑は、いつまでも色は褪せないと詠じた歌である。神の変わらぬご加護を「松の緑」で表現するなら「色」の語が適しているだろう。

小宮本と伝為相筆本の本文は、所蔵本と同じ「ちぎりし色」である。

以上の検証からも明らかなように、諸伝本の本文校合は、各伝本の特徴をとらえる手掛かりになるのである。無論、伝本間の異同は、書写者の和歌志向から生じたとも、和歌知識の程度に拠るものともいえるだろう。所蔵本の異同も同様の理由が原因と考えられるが、所蔵本にはその人物を推し量る記述がない。唯一、前遊紙と後遊紙の各表の押印には「仙領 氣仙沼 八日町 清水屋」とあり、過去に所蔵していた人物の居住地は推定できるが、書写者を特定するものとはいえない。今後は、所蔵本の書写に使われた写本を特定する上で、この印の調査が必要になるのである。

5. むすび

今回、所蔵小形本の本文を第二類本に属する寿本の本文と比較するとともに、同じく第二類本の小宮賢次郎旧蔵本・伝為相筆本とも一部ではあるが、校合を試みた。その結果、所蔵本の特徴として、次のことがいえる。

- ①本伝本は切出し歌を 3 首含んでいること
- ②他の第二類本の伝本と比べて、本伝本は詞書の簡略化が認められること
- ③作者表記は、姓を補い表記していること
- ④歌本文は、他の第二類本と比べても異同は少ないこと
- ⑤所蔵本の歌本文は、寿本より小宮本や伝為相筆本の本文と一致すること

現存する写本の多くが第二類本に属するように、所蔵本もまた、第二類に分類される写本である。だが、その書写に用いられた写本は、寿本とは異なる伝本で、小宮賢次郎旧蔵本や伝為相筆本の流れを汲む第二類本といえそうである。

小形本の調査は、筆者自身も調査対象から外してきた。しかし、今回、所蔵本の調査を試みた結果、小形本の調査は、第二類本の伝本研究に有用であると確信したことを、最後に述べておきたい。

【注】

- 1) 岩波文庫『新訂新古今和歌集』（佐々木信綱校訂）、笠間書院『新古今和歌集 穂久邇文庫蔵 伝二条為氏筆』（後藤重郎編・影印本）で、全文が紹介されている。
- 2) 「新日本古典文学大系」（岩波書店刊）解説参照。
- 3) C「住よしと」の詠は、第二類系統に属する佛教大学附属図書館蔵本との間に、異同がある。
五句「まつとせしまに」→「跡とせしまに」
- 4) 卷二十・釈教歌は墨付 240 丁裏まで。異本歌は、ページを改めた墨付 241 丁面・同裏に記す。

寿本(新編国歌大観底本)		寿本と所蔵本との本文異同 (寿本の本文) - (所蔵本の本文)		小宮本 (大系本)	伝為相筆本 (新大系本)
番号	初 句				
35	なごのうみの	詞書	よめる-ナシ	○	○
38	春の夜の	詞書	守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに-ナシ	○	○
39	しるらめや	詞書	よみける-よみはべりける	△	△
81	我がこころ	詞書	歌合歌-哥合に	○	○
83	いまさくら	詞書	たてまつりしに-奉し時	○	○
99	さくらさく	詞書	侍りしをり-はへりけるおり	○	○
104	ももしきの	作者	赤人-山邊赤人	○	○
106	霞たつ	詞書	歌合に-哥合の哥	○	○
115	ちりちらす	四句	たなびく山の-立田の山の	○	○
116	山さとの	初句	山さとの-山寺の	○	○
118	山さくら	詞書	よみ侍りける-よめる	○	○
123	このしたの	初句	このしたの-木のもとの	○	○
191	郭公	詞書	侍りけるに-侍りける	○	侍りければ
226	小山田に	詞書	釋阿-釋阿に たまはせ侍りし時-たまはせし時	△/○	○/○
257	まどちかき	詞書	いへる-いふ まつりし時-まつりしに	○/○	○/○
258	むすぶてに	五句	かたぶきにける-傾きにけり	○	○
261	すずしさは	詞書	水辺冷自秋-水辺涼自秋	○	○
262	みちのべに	五句	立ちとまりつれ-立ちとまりけれ	○	○
263	よられつる	二句	野もせの-野面の	○	○
274	ひさぎおふる	詞書	よめる-よみ侍りける	○	○
		五句	夕かぜ-初風	○	○
275	白露の	三句	ませの中に-ませの内に	○	○
283	なつはつる	四句	いづれかまづは-いつれか先に	△	△
292	あけぬるか	詞書	侍りけるに-はへりける時	○	○
		作者	家隆朝臣-藤原家隆朝臣	△	△
305	をぎの葉も	詞書	たてまつりける時-奉し時	○	○
		五句	つまとなりけむ-妻となるらん	○	○
314	このゆうべ	作者	赤人-山邊赤人	○	○
		二句	ふりつる雨は-ふりくる雨は	○	○
315	としをへて	詞書	大臣の家に-大臣家に 侍りけるに-はへりける	○/○	△/○
322	いかばかり	二句	身にしみぬらむ-身に入ぬらむ	○	○
327	たなばたは	作者	貫之-紀貫之	○	○
328	河水に	詞書	中に-奉りけるに	○	○
340	うすぎりの	作者	清輔朝臣-藤原清輔朝臣	○	○
379	いつまでか	詞書	月の歌-月哥中に	○	○
390	ふけゆかば	詞書	たてまつりし時-奉し時秋哥中に	○	○
392	ながめつつ	作者	家隆朝臣-藤原家隆朝臣	○	○
394	時しもあれ	詞書	歌合-哥合に	○	○
402	こととはむ	四句	浪と月とに-月と浪とに	○	○
415	ながめつつ	二句	おもふもぬるる-思ふにぬるゝ	△	△
420	さむしろや	作者	定家朝臣-藤原定家朝臣	○	○
422	ゆくすゑは	詞書	たてまつりし時-奉りけるに	たてまつりしに	○
467	庭のおもに	作者	基俊-藤原基俊	○	○
473	むしのねも	作者	家隆朝臣-藤原家隆朝臣	○	○
478	さとはあれて	詞書	衣うつと-衣をうつと	○	○

480	秋とだに	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
486	秋はつる	詞書	九月十五夜－九月十三夜	○	○
488	ひとめみし	詞書	侍りけるに－はへりける時	○	○
490	秋の夜は	詞書	つごもりがたに－ついたちかたに	○	△
506	秋風の	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
509	いまよりは	詞書	題しらず－ナシ 五句 菊の上の露－菊のしら露	○／○	○／○
516	いろかはる	五句	のべの秋風－野への秋哉	○	○
527	ころとや	詞書	よみ侍りけるに－よみけるに 紅葉－紅葉を	△ ○	○ △
530	たつた山	初句	たつた山－立田川	○	○
532	時わかぬ	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
533	故郷は	作者	俊頼朝臣－源俊頼朝臣	○	○
537	露しぐれ	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
541	あすかがわ	三句	かづらきの－神なひの	○	○
		五句	吹きぞしくらし－吹そしぬらし	吹きぞしぐるゝ	○
543	紅葉ばを	詞書	侍りけるに－はへりける比	○	○
546	うちむれて	詞書	よみ侍りける－よめる	○	○
548	かくしつつ	三句	おいぬれど－老ぬれは	○	○
557	日くるれば	作者	俊頼朝臣－源俊頼朝臣	○	○
558	おのづから	四句	木の葉ふりしく－木のはふきまく	△	△
562	はつしぐれ	五句	そめずや有りけむ－そめすやあるらん	○	○
602	紅葉ばは	初句	紅葉ばは－紅葉ゝを	○	○
604	秋の色を	作者	雅経－藤原雅経	○	○
606	我がかどの	二句	かり田のねやに－かり田の面に	○	○
610	かげとめし	作者	雅経－藤原雅経	○	○
616	君こずは	作者	清輔朝臣－藤原清輔朝臣	○	○
619	草のうへに	作者	好忠－そねのよしたゝ	○	○
621	しぐれつつ	三句	花なれば－花なれと	○	○
641	うばたまの	作者	赤人－山邊赤人	○	○
651	風さゆる	作者	正三位季経－正二位季経	○	○
652	はかなしや	作者	雅経－藤原雅経	○	○
659	ふる雪に	作者	基俊－藤原基俊	○	○
671	こまとめて	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	△	○
673	夢かよふ	作者	有家朝臣－藤原有家朝臣	○	○
676	雪のみや	作者	貫之－紀貫之	○	○
704	ゆくとしを	作者	有家朝臣－藤原有家朝臣	○	○
710	君が代の	作者	貫之－紀貫之	○	○
713	君が代に	三句	おほけれど－おほければ	△	△
717	山川の	作者	興風－藤原興風	○	○
718	いのりつつ	詞書	屏風歌－屏風哥に	○	○
719	山人の	初句	山人の－仙人の	○	○
720	神無月	作者	清原元輔－元輔	○	○
722	くもりなく	詞書	くまなかりける－くまもなかりける 侍りける－はへりける時	○ ○	○ ○
730	君が代は	二句	ひさしかるべし－久しかるへき	○	○
739	我がみちを	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
743	年へたる	作者	清輔朝臣－藤原清輔朝臣	○	○

751	くもりなき	詞書	悠紀屏風に－悠紀方屏風に	△	○
754	神世より	詞書	寿永元年－仁安元年	○	○
755	たちよれば	詞書	建久九年－元暦元年	○	○
756	ときはなる	詞書	おなじ大嘗会－建久九年大嘗會	おなじき大嘗会	○
772	さもこそは	詞書	返し－御返し	○	○
787	いまはさは	詞書	さかのへんに－さかのほとりに	○	○
788	玉ゆらの	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
793	くちもせぬ	詞書	中將のつかと－中將のはかと	○	○
795	うき世には	詞書	法輪に－法輪寺に	△	○
798	故郷を	詞書	よみ侍りける時－よみける哥	よみ侍りける歌	よみ侍りける歌
802	おもひいづる	四句	たぐひしられぬ－乱しられぬ	○	○
808	ほしもあへぬ	作者	道信朝臣－藤原道信朝臣	△	○
820	みし人の	詞書	見侍りてよめる－見はへりて	△	△
826	かきとむる	詞書	み侍りける－見はへりけるに	△	△
828	かぎりなき	二句	おもひのほかの－思ひの程の	△	△
		三句	夢のうちは－夢の中は	○	○
830	世中は	作者	清輔朝臣－藤原清輔朝臣	○	○
833	きのふみし	三句	おどろけど－おとろけは	○	○
851	白玉か	作者	業平朝臣－在原業平朝臣	○	○
878	かへりこむ	作者	基俊－藤原基俊	△	○
883	たれとしも	詞書	侍りける－侍ける時	△	△
885	きみいなば	詞書	まかりける人－まかる人に	まかりける人に	○
886	たのめおかむ	詞書	いでたち侍りけるに－出立ける	○	○
887	さりととも	二句	猶あふ事も－なをあふことを	△	△
891	わするなよ	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
893	都をば	二句	心をそらに－心のそらに	○	○
903	しなのなる	作者	業平朝臣－在原業平朝臣	○	○
905	草枕	作者	貫之－きのつらゆき	○	○
911	神風や	初句	神風や－神風の	△	△
912	故郷の	詞書	山山寺寺－山／＼寺／＼に	○	○
915	旅衣	詞書	いつほどに－いつほと とひければ－はへりければ	○／△	○／○
916	ふねながら	作者	実方朝臣－藤原実方朝臣	○	○
928	太山路に	五句	雪つもりつる－雪つもりつゝ	△	△
932	夏かりの	詞書	家に－家 侍りける－はへりけるに	○／△	○／○
938	月見ばと	二句	契りおきてし－契て置し	○	○
947	ゆくすゑは	詞書	たてまつりし時－奉しに	△	△
952	いづくにか	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
954	故郷に	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
955	しら露の	作者	雅経－藤原雅経	○	○
968	わすれなむ	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	△
969	ちぎらねど	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
977	おほづかな	詞書	(述懐百首よみ侍りけるたびの歌)－千五百番哥合に	△	△
980	そでにふけ	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
982	宮こにも	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
1009	煙たつ	作者	深養父－清原深養父	○	○
1017	いくかへり	作者	能宣朝臣－大中臣能宣朝臣	○	○
1047	心のみ	詞書	なきつるは－なきけるは	○	○

1073	かちをたえ	詞書	たてまつりし時－奉しに	○	○
1080	みるめかる	作者	業平朝臣－在原業平朝臣	○	○
		二句	方やいづくぞ－方やいつくと	○	○
1117	すまの海士の	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
1128	たのめおきし	詞書	たてまつりしに－奉し時	○	○
1187	たれゆきて	詞書	みちの－心ち	こゝちの	こゝちの
1188	きえかへり	詞書	まかれりけるに－まかりけるに	○	○
1218	山しろの	作者	重之－源重之	○	○
1246	かすむらん	詞書	まだとしもかへらぬに－としもかへらぬに	○	○
1316	さても猶	四句	雲ふく風の－雲ふく風も	△	△
1327	心こそ	詞書	尋恋を－尋恋	△	△
1329	いきてよも	二句	あすまで人も－あすまで人は	○	○
1387	あふと見て	三句	あけぬなり－あけにけり	○	○
1388	ゆかちかし	初句	ゆかちかし－ゆかちかく	○	○
1395	ながれいでむ	四句	もとめぬ袖の－□ぬ袖の	○	○
1437	山陰や	詞書	侍りけるに－はへりける	○	○
1443	おそくとく	四句	誰がうゑおきし－誰植をける	○	○
1444	百城に	詞書	よみ侍りける－よめる 初句 百城に－百敷に	○／△	○／△
1449	みちのべの	詞書	柳を－柳	○	○
1450	昔みし	作者	深養父－清原深養父	○	○
1456	なれなれて	詞書	先まかりて－まかりて	○	○
1457	故郷と	詞書	むすびつけて－むすひつけ	○	○
1459	をる人の	詞書	みこの－みこのもとに	○	○
1480	八重ながら	詞書	実方朝臣－実方朝臣に	作者表記ナシ	○
1498	秋やくる	詞書	つかはしてけるに－つかはして侍けるに	△	△
1503	うき雲に	五句	ひまもりにける－ひまもりにけり	○	○
1514	都にも	詞書	よみ侍りける－よめる	○	○
1515	淡路にて	五句	心からかも－所からかも	○	△
1518	たのめこし	三句	山風に－山のはに	○	○
1536	ふけにける	五句	かたぶきにける－傾きにけり	○	○
1539	秋をへて	詞書	めししに－めしゝ時	○	○
1545	都なる	詞書	おくれりける－侍ける	○	○
1548	雲をのみ	四句	月よこずゑに－月や梢に	○	○
1550	あやしくぞ	詞書	いつばかりの－いつはかりよりの	△	○
1575	うつろふは	詞書	給ひて－たまひて後	△	△
1579	君が代に	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
1594	年ふれば	詞書	よみ侍りける－よめる	○	○
1602	あまをぶね	作者	俊頼朝臣－源俊頼朝臣	○	○
1603	和歌の浦を	詞書	こころをよめる－心を	○	○
1615	風になびく	五句	我が心かな－我おもひ哉	△	△
1624	滝の音	五句	夢はみてまし－夢は見せけり	△	△
1653	ひさかたの	作者	有家朝臣－藤はら有家朝臣	○	○
1655	天の川	作者	実方朝臣－藤原実方朝臣	○	○
1664	いつかわれ	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
1668	かげやどす	作者	雅経－藤原雅経	○	○
1686	わくらばに	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
1708	あしがもの	作者	能宣朝臣－大中臣能宣朝臣	○	○

1709	老いにける	作者	順－源順	△	○
1717	いにしへの	詞書	しほがまの浦－塩かまの浦を	○	○
1725	おほよどの	作者	定家朝臣－藤原定家朝臣	○	○
1763	君が代に	作者	雅経朝臣－雅経	○	○
1791	ちとせふる	二句	松だにくつる－松たにくゆる	△	○
1792	かずならで	作者	俊頼朝臣－源俊頼朝臣	○	○
1794	春日山	作者	家隆朝臣－藤原家隆朝臣	○	○
1798	いにしへの	作者	道信朝臣－藤原道信朝臣	○	○
1802	こがらしの	詞書	(秋雨を)－題しらす	詞書ナシ	△
1822	をざさ原	三句	消えやらず－消やらて	消えやらずでイ	○
1844	すゑのよも	詞書	寂蓮－寂蓮法師 いなび侍りて－いなひて	○／○	○／○
1855	夜やさむき	詞書	侍りける時－侍る時	○	○
1861	われたのむ	詞書	人－人の	○	○
1880	やはらぐる	詞書	よみ侍りける－よめる	○	○
1900	をしほ山	四句	ちぎりしはるは－契し色は	△	△
1914	さかきばの	作者	能宣朝臣－大中臣能宣朝臣	○	○
1950	いにしへの	五句	くもらざりけむ－くもらさりけり	○	○
1967	いまぞこれ	詞書	よみ侍りける時に－よみはへりける	○	△
1978	やみはれて	詞書	よみ侍りける－よめる	○	○

